

『西郷隆盛伝』評

『西郷隆盛伝』の伝記として比較的早く世に出でたるものにして、また今までに著されたる諸種の伝記中『大西郷全集』中の一巻を除けば、最も詳細なるものといふべし。

著者は薩摩出身の維新史家にして、夙に隆盛の人物に傾倒し、その十年役における心事を悲しみ、隆盛本来の精神と、その一代の事業を明らかにせんがために明治二十三年二月以来、伝記編纂に志し、同二十五年十一月より筆を執り、翌年十月に至って、脱稿せるものにして、その資料とするところは、維新前後の関係文献は勿論、先輩の著書、並に元老その他、当時の事蹟に精通せる人の談話に徴し博搜精究、事実の網羅と考証の正確を期したるが如く、特に大久保家・吉井家等の文書記録に好材料を得たることは、その緒言に言へるが如し。ただ本書は伝記として見れば、維新前における隆盛の事蹟を叙するに最も詳しく、維新後において、聊か簡に失するの悩みあり。

これは著者も言へるが如く、当時にありて、明記する能はざる種々の事情ありしためにして、この点やや

残念の感あるも、今日にても西郷隆盛の伝記として、有益なる書籍たる

を失わず。(高梨光司著『維新史籍解題伝記編』より)



『西郷隆盛伝』目次

- 第一篇 隆盛少壯時代 ① 隆盛の幼年、② 隆盛精神の修養、③ 齊彬封を継ぐ、
④ 隆盛の抜擢
- 第二篇 勤王時代 第一期 ① 公武一致論、② 隆盛薩藩の改革を計らんとす、
③ 齊彬と安部正弘、④ 幕府繼嗣問題及条约調印一、⑤ 同二、⑥ 齊彬入京公武の間に尽さんとす、⑦ 安政の大獄、⑧ 第一の謫居
- 第三篇 勤王時代 第二期 ① 謫居中の事情、② 隆盛第一の召還、③ 隆盛久光の怒に触る、④ 第二の謫居
- 第四篇 勤王時代 第三期 ① 孤島中天下の事情、② 隆盛第二の召還、③ 長州の京師騒乱、④ 騒乱後京師の事情、⑤ 長州征討

▼本書は明治二十七年八月より明治二十八年三月までに刊行された第1版全五巻を、今回の復刻に際しては一冊にまとめ、新しくノンブルを付すものです。

第八篇 退朝時代 ① 退朝後の形勢、
② 退朝後隆盛の挙動、③ 十年戦乱の発端、
④ 十年の戦乱

第五篇 王政維新 ① 長州征討の儀及外船入撰、② 王政復古の決心、③ 薩藩の改革及五卿事件、④ 長州再征、⑤ 国是論、⑥ 王政復古の準備、⑦ 王政復古

第六篇 戊辰の戦乱 ① 大変革後の挙動一、② 同二、③ 大変革及廢藩置県の準備、④ 大変革及廢藩置県、⑤ 在朝中の事情、⑥ 征韓論一、⑦ 同二、⑧ 隆盛辞職せし時の事情、

第七篇 立朝時代 ① 隆盛在藩中の挙動、② 戊辰の破烈、③ 幕府征討、④ 德川処分、⑤ 奥羽北越戦争、⑥ 箱館戦争

著者: 勝田孫彌
著: 勝田孫彌
発行: マツノ書店

西郷隆盛傳

勝田孫彌

限定三百部復刻

マツノ書店

没後十余年
地元の篤学が復元した
虚飾なきその原像!

マツノ書店

■ 体裁 A5判上製箱入り九二〇頁
■ 定価 一万五千円(税込・手数料込)
■ 特価 缀切 平成19年9月30日
■ 発売 同年11月1日予定
■ 予約特価 一万三千円(税込・手数料込)
■ 限定三百部 (番号入)
■ 書店不卸 ■ 締切厳守

藩連合して以て天下に率先せざるべからざるを説きたり黒田大に悟る所あり。以爲らく薩長の連合を計畫せんには長藩の木戸孝允に説き之をして京師に出で、西郷、大久保等と會合せしめ互に胸襟を開きて談合せしむるに若かず余單身以て此事に當るべし幸に成功を得ば其國家に益するや大なり事若し成る能ひざるも余自ら其責に任せば亦不可なかるべしと斷然意を決して京師に出で之を以て隆盛に説きたり然るに勤王黨連合は隆盛の夙に企畫せし所なるを以て大に黒田の説を贊成して其事に盡力せしめたり黑田乃ち直に京師を發して單身山口に入り先づ品川彌次郎に面會して來長の目的を談じ其紹介を以て初て木戸孝允に會するを得たり木戸曰く足下の厚意深く謝する所ありと雖も事重大なり須く主人に告げて其許諾を得ざるべからずと翌日本戸は毛利侯に謁して黒田の來意を説き且つ黒田をして侯に面して其意見を陳述せしめたり侯大に喜び直に木戸に命じて黒田と共に上京せしめ品川彌次郎を以て其隨行と爲せり木戸等山口を出發し慶應二年一月京師に入りて隆盛に面會せり是れ實に隆盛と木戸との初めての會合なりき廿一日に至り愈薩長の確執を解き共に連

及び筑前侯齊博大に力を盡し遂に薩藩内に大赦を行ひて高崎黨の罪をも免ずるを得たり故に其一派の救助せられ其志を伸張するを得たるは亦齊博の力與

りて大なりと云ふべし(黒田齊博公傳・右大臣大久保公神道碑諸氏の直話參照)

此等の事情よりして齊彬も隆盛等の姓名は夙に詳知せる所なりき故に安政七年正月齊彬の鹿兒島を發し水

神坂上の茶店より着するや乃ち頗みて曰く西郷吉兵衛は孰れる乎と隨從の士

隆盛を指して答へたりと云へり是れ齊彬が隆盛を見たるの始なり(諸氏然れど

も未だ遽に其精神を實行するを得ざりしが出府の後漸く其機會を得て之を抜

擢するに至りしなり而して隆盛をして齊彬に面謁するの道を得せしめたるは

福崎七之丞なりとす福崎人となり誠實にして友義に厚く隆盛の雄資ありて一

個の偉丈夫なるを悟り齊彬に告げて竊に引見せしめしより齊彬一見して隆盛

の非凡の人物なるを察し大に之を喜び竊に内命を傳へて庭方役を出願せしめ

たりしが直に之れに任せられたり元來庭方役に有爲の人材を任じ直接に密事

を談するの便に供したるは齊彬よりし事にあらず齊彬を薦陶したる榮翁の

世に幕府の庭掃除番に擬し創始したるものにして其長を庭奉行と稱したり(齊

三十四

百七十四

溘然逝くに至れり(戊辰始末難新史)

坂本中岡等の襲撃せらるゝや復古黨は大に憤慨し其刺客ハ三浦安等の指揮に

出てたりとなし十二月七日の夜に至り三浦の旅寓を襲撃せり然るに三浦は微

傷を蒙りたるのみにして其禍を免れたり(戊辰始末難明雜記等)

此の如く兩黨の確執は甚しかりしが尋いで岩倉も洛中の住居を容され大久保

も着京し廿三日に至り忠義、隆盛も亦大兵を率ゐて出京するに及び復古黨の勢

焰愈强大となれり

隆盛等の京師に着するや直に岩倉等に計り大革新の準備を爲したり然るに隆盛等の計画せる大變革にハ獨り幕府黨のみならず土、越等の一派も亦其意見を異にしたり即ち初め十一月八日に春嶽の京師に着するや福岡孝悌は其翌日直に春嶽に面して談合する處ありき其論旨は公卿等に計り諸侯の意見を諮詢して慶喜を政治の首位に置き公議輿論に決し以て國是を一定せんとするゝありき春嶽其説を贊成したるにより愈此議に決して越前、更に尾州肥後の二藩に説き土州は藝と薩とに説き又藝州をして因、備の兩藩を遊説せしむるに定め各

(諸氏直話) 是より隆盛庭内に出入し齊彬に面謁して國事の機密を談するに至れり齊彬又

隆盛の人物を愛し深く親任する處あり齊彬の親交ありし松平慶永(城主後藤一の手記より)

(前)慶永齊彬面語の節私家來多數あれども誰も間に合ふものなし西郷一人以て齊彬の隆盛を信任したる一般を見るべし而して曠世の英雄たる隆盛の人

は薩國貴重の大寶なり乍併彼は獨立の氣象あるが故に彼を使ふ者私ならではあるまじくと被申候云々(松平春嶽公傳)

事に關するの首途とも稱すべくして其生涯に一段落を爲したるものなり

内容見本

(70%縮小)

盡力斡旋する所あり又幕臣梅澤孫太郎、永井尚志等にも謀りて其同意を得たり

肥後尾張の諸藩も此説に賛同し當時在廷の公卿等も頗る之に力を盡すに至り

しかば復古黨の公卿中山正親町三條等の如きも稍其説に傾きて斷然の決擧を

猶豫せんとするの形勢を顯はしたり(事大久保日記甲戌難紙、慶喜記)

然るに若し此等の議論行はれ幕府ハ依然として存立し慶喜政治の首位にありて猶政權を掌握

する以上は王政復古は名のみにして其實を得る能はざるは復古黨の夙に覺知

せる所なりされば岩倉は此形勢を觀て大に之を憂へ大久保に談じて中山等に

遊説せしめたるのみならず猶諸卿の遲疑せんことを憂へ更に隆盛等に命じて

其意見を陳述せしめたるを以て十二月四日に至り隆盛は大久保吉井伊地知等

と岩下の邸に會合し斷然後藤等の説を退くるに決定せり(慶明難紙、戊辰始末日記)

其意見書に曰く



よみがえる西郷伝の原点

作家 桐野 作人

今年は西郷南洲の生誕百八十年であるとともに、城山の露と消えて百三十年にあたる。その節目の年に勝田孫弥著『西郷隆盛伝』が復刻されることには、まことに印象深い。

西郷隆盛といえば、維新三傑の一人としてあまりにも有名である。西郷について書かれた著作はまさに汗牛充棟の感がある。西郷に関するあらゆる文献を収集した野中敬吾氏の目録（一九八九年まで）によれば、西郷の伝記・評伝・小説・言行録などは二六四点、遺文・書簡集・遺墨集・画帖が七四点という多数に上っている。これは書籍に限定した専論だけであり、少しでも西郷に触れた書籍や雑誌、戊辰戦争や西南戦争に関するものまで含めると、その数は数え切れないほど膨大だろう。

明治以来、その数奇な運命もあってか、西郷への国民的関心が高く、各種の西郷文献がおびただしく蓄積されてきたなかで、この西郷伝はまさに本格的伝記の端緒であり、その後の西郷論の方向性を決定づけたものだといつてよい。この西郷伝抜きに、西郷を語ることはできないといつても過言ではない。

著者は鹿児島出身の伝記作家、勝田孫弥（一八六七—一九四一）である。勝田の家は島津家の門閥家、肝付氏の家来の家柄だった。西郷や大久保のような城下士と異なり、さらに身分が低い私領士（陪臣）だった。勝田は上京して明治法律学校で法律を学び、『帝国議会要論』を著すなど、立憲政治に関心をもっていた。それがなぜか伝記作家に転身することになった。

勝田といえば、『大久保利通伝』が有名だが、『西郷隆盛伝』はそれに先立つこと十六年前、明治二十七八年（一八九四—九五）の著作である。勝田にとっては、はじめての本格的伝記だった。ときに勝田二十七歳である。

もつとも、勝田が西郷について書いたのはこれが初めてではなかった。同二十三年、泰東散士という筆名で『西郷月照投海始末』（金港堂刊）という小冊子を著している。この小冊子がどのようなきさつで書かれたかわからぬが、その執筆過程が刊行後、郷里の先輩たちの知遇を得たのかもしれない。それとくいうのも、勝田が西郷伝執筆の準備に取りかかったのが明治二十三年二月であり、右の小冊子の刊行年と同じだからである。この時期は西郷再評価の画期でもあった。前年二月、大日本帝国憲法の発布に伴う大赦で、西郷は賊名を解かれ、改めて正三位を追贈された。西郷の名誉回復が封印されていた伝記執筆の重要な契機になつたのは間違いないだろう。

さて、勝田が伝記執筆のために史料を収集しはじめたところ、すぐさま困難に逢着した。西郷は書簡などの文書や記録類をほとんど保管していなかつたし、日記もつけていなかつたからである。「就中、安政・万延の間に於ける隆盛の書翰、記録の如きは之を収集すること尤も困難なりき」と勝田が告白しているように、とくに齊彬時代の西郷の足跡を辿ることは難しかつた。

そこで、勢い大久保利通をはじめとする旧友の文書・記録類を頼ることになつた。とくに大久保家には西郷からの多数の書簡が保管されていたばかりか、大久保の詳細な日記も遺つていた。この日記はのちに『大久保利通日記』（日本史籍協会叢書）として刊行されるが、その一部が最初に活用されたのは『西郷隆盛伝』だったと思われる。勝田も同伝の緒言で、とくに大久保利和（利通長男）・牧野伸顕（利通三男）・吉井友実の三氏の名をあげ、「本伝の成るは偏に右三氏の尽力に依りしものなり」と謝意を表しているほどである。利通がすでに亡いため、存命していた友実の直話が文書や記録に劣らず役立つただることは論をまたない。

勝田は緒言で、西郷の伝記編纂がその死の翌年である明治十一年（一八七八）に、すでに発案されていたことを明らかにしている。発案者はかつての盟友だった大久保その人である。大久保は郷里の朋輩で修史館の編纂官だった重野安繹に、「西郷の真相を知っている者は自分以外にいない。ただ、自分には国事があつて執筆する時間がない。だから、君に頼みたい」と、西郷の伝記編纂を委任した。

ところが、同時に大久保も紀尾井町で暗殺されたため、西郷の伝記編纂は遷延のやむなきに至つていた。勝田は同伝編纂にあたり、「大久保の遺しし記録に基きて隆盛の伝記を著はし之を発行するに至りしは、大久保の宿志」だと書いて、西郷伝の執筆は大久保の遺志を受け継ぐものだと位置づけていた。

「余の本云を草するや、務めて材料の翼足を真々、叙事平論の大奥寥なかうんを期へたり。故こ孟良士撰」
（もうらうぞせん）

の少きを信ず」

史料をできうるかぎり渉猟したばかりか、現存の関係者に直接取材したうえで、より実証を心がけたことがうかがわれる。これはのちの大久保伝と共通する。まさに伝記の王道的な方法論といつてよい。

一例を挙げよう。鳥羽伏見戦争が勃発するに至ったのは、慶応三年（一八六七）暮れの江戸の薩摩藩邸焼き打ち事件がきっかけだったことはよく知られる。薩邸には浪士たちが結集して関東攪乱工作を進めていた。したがって、江戸藩邸焼き討ちも鳥羽伏見戦争を誘発させるための西郷の挑発の結果だと評されることが多い。しかし、勝田は蓑田伝兵衛宛て西郷書簡を引用して、西郷が江戸の形勢をよくつかめずおり、江戸藩邸の浪士たちが「決して暴挙いたすつもりとは相見えず」と困惑した様子でいることを示して、西郷謀略説を間接的に否定している。

また薩長同盟の成立時期についても、慶応二年正月二十一日だとはつきり書いており、その後の通説形成に大きく寄与している。大政奉還についても、薩摩藩にはすでに織り込み済みだつたとして、「故に彼の土州の建白を以て青天霹靂の拳の如く論ずるは少しく事実を誤るものにして復古党の間には既に之を協議したるの後なりき」と述べている。大政奉還と王政復古を、あるいは薩土の関係を対立的にとらえていなのは先見の明というべきで、近年の論調に対する痛撃となつていて。

もつとも、大久保家の史料を使いながら、西郷を叙述することの限界もあつたのではないかと察せられる。全体構成のうち、明治以降の考証や考察にやや物足りなさを感じるのも、征韓論で二分されてしまった現存する関係者の立場を慮つた面もあるのかもしれない。

しかし、それは時代に制約されたわずかな瑕疵にすぎず、この伝記の価値を損じるものではない。全体を通じて、勝田の叙述は簡にして明、ところどころに所論の要請に応じて一級史料や関係者の証言が的確に引用されており、現代文に親しんでいる私たちにも比較的読みやすい。何より、その内容は一世紀以上経た今日においても、さほど古ぼけていない。西郷伝の古典として、なお参照される必要があるだろう。

ところで、小生も『西郷隆盛伝』全五冊の古ぼけた分冊綴りをもつてている。だいぶ前に古書で購入したものだが、表紙などは今にもくだけそうに脆くなっている。今回は全冊を一巻にまとめた形での復刻だとう。これで一層利用しやすくなるのは間違いない。マツノ書店の復刻は個人的にも時宜を得たものだつた。



海舟翁南洲談

■西郷というと、キツそうな貌をしておつたように画かぬと人が信じないから、ああ書くがネ、極く優しい顔だつたよ。アハハなどと笑つてネ、おとな溫和しい人だつたよ。

■ナアに、維新の事は、おれと西郷とでやつたのサ。西郷の尻馬にのつて、明治の功臣もなにもあるものか。自分が元勲だと思うから、コウなつたのだ。

■ソリヤア、西郷が第一サ、大久保になると、少し小さくなつたナ。木戸と来ると、もう急いで仕方がなかつた。ダガ、あの三人は、なかなか今の功臣のような、やにつこいものジャない。どんな事が来ても、その手は夙さから知つて、いるという調子だ。

『西郷隆盛伝』のこと

■これ位の国だもの、西郷くらいの奴が一人か二人ありやあ、それで治まるのサ。ナンデモありやしない。

■勝田の西郷伝はよく出来た。今でこそ鹿児島の人もかれこれ言うが、あのころはかまやあしない。ミンナ党派があつて、その党の人だけしかありがたがりあしなかつたのサ。
(新訂海舟座談)巖本善治編 勝部真長校注 岩波文庫版 卷末の「海舟翁南洲談」より)

西郷隆盛という人物がどんな人物だつたかは、今日では残された史料や文献によつてしか学ぶことができない。しかし、西郷に関する評伝はあまりにも多く、しかもそのほとんどが虚偽虚飾に満ちている。これは、不幸にして明治十年の戦争があつたために西郷の伝記が書きにくかつたこともあり、また、当時の政府が故意に史料を煙滅したことであつて、伝記執筆に幾多の支障があつたことにもよる。

今日ここに復刻する勝田孫弥の『西郷隆盛伝』は、完璧なものではないが、既存の西郷伝の中では学者的良心に貫かれた偏見のない最も正しい西郷伝である。西郷のこれまでの虚飾をこの際全部剥ぎ取り、一度裸にして出なおさなければならぬ。この意味で、勝田氏の本書は虚飾のない、皮と肉をとつた骨だけのようであるが故に、今後の研究の足がかりにする意義は充分にある。